

“ひと”のなりたち

アクアタック研究室
片岡 章

わたしたち“ひと”は、どのようなありかたをしているのでしょうか、どのように成り立っているのでしょうか？ 頭があって、腸があって ... これはもう、いうまでもないことで、それもたしかに“ひと”の姿です。でも、それだけだとしたら、ずいぶん寂しい話です。ちょっと思い浮かべてみてください、“ひと”がしていること、生きて活動している“ひと”の姿。

動く、働く、子供を産む、泣いたり笑ったり怒ったり ... 、考える、などなど、さまざまなことをしていますね。

というと、ごちゃごちゃと放り込まれたおもちゃ箱のように、こういったものがただ雑然とひとのなかでひしめいている、そんなイメージを持たれるかもしれませんが、けれども、実はそうではありません。これらは、きれいな層をなしているのです。

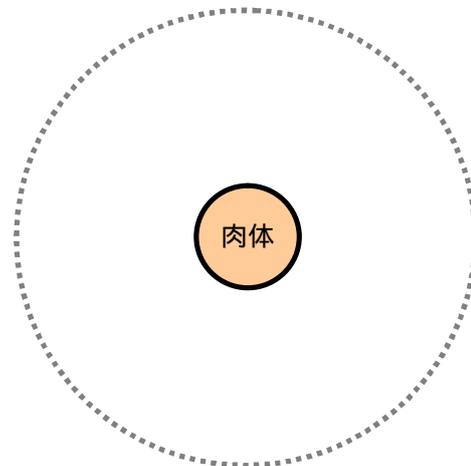
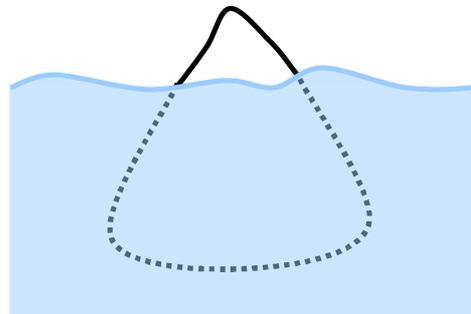
いまから、そのあたりを見ていきましょう。そうすれば、「わたしたちが日々どのように過ごせばよいのか」のヒントを手にすることもできるでしょう。



はじめに、氷山を想像してみてください。海面より上に、山型の氷山が浮かんでいます。わたしたちが通常「氷山」と呼んでいるのは、この部分です。しかし、ご存知のように、これは「氷山の一角」。実際には、海面下に大きな氷の塊が隠れています。いいかえれば、それだけの塊があるからこそ、海面上の氷山も、その状態を保っていられる、ということになります。つまり、見えない部分も、必要不可欠なのです。

ひとの場合も同じです。理由はこれから明らかになりますが、目に見える肉体だけでなく、そのうしろに隠れた“なにか大きなもの”がそれを支えている、と考えることができます。

その様子を表したのが右の図です。氷山を上から見たところだと思ってください。海面上の氷山が中央の円(肉体)、その外側が、海面下の見えない部分です。あるいは、山の頂上あたりだけが見えていて、あとは



雲の下に隠れている、という景色を想像していただいてもかまいません。

さて、肉体というのは“物質”です。ここで、あなたは、「自分は単なる物質だ」ということで納得できるでしょうか？ きっとできないでしょう。単なる物質だとすれば、石ころや机と同じ、ということになりますし、人間だとしても、死体にすぎないことになります。

生きているわたしたちは、動きますし、働きますし、子孫を残します。こういった、「生命活動・生殖」の側面がなければ、ひととはいえません。

そこで、生命・生殖というドーナツを、肉体の周りにはめ込んでみましょう。

ただし、ここは、“物質”ではなく、目には見えない“エネルギー”の世界です。肉体を生かし、子孫を残そうとするエネルギーです。



肉体 + 生命　　これで、“生きて子孫を残す生きもの”になりました。では、この形で納得でしょうか？ まだしっくりきませんね。これだけでは、人間として生きている、という実感は得られないでしょう。生きて子孫を残すだけなら、植物と変わりありません。

人間らしくなるためには、あと、なにが必要でしょうか？

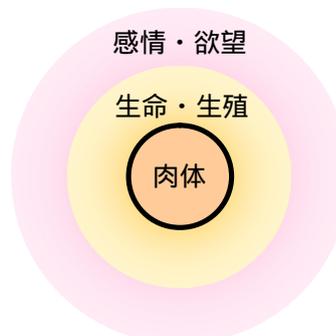
もうおわかりだと思います。はじめにも申しましたが、泣いたり笑ったり怒ったり ... という、感情や欲望の働きが、わたしたちにはあります。

こんどは、感情・欲望というドーナツを付け加えてみましょう。ここでは、好き/嫌い、好都合/不都合、などの、“自分の価値観を中心とする”主観的なエネルギーが働いています。「自分にとって価値や意味があるかどうか」という観点です。他人は二の次なのです。仮に献身的に尽くしているように見えても、自分の満足のためにおこなっているにすぎません。ややもすると、「こんなに尽くしてあげてるのに！」と恨んだりもします。

とはいえ、感情や欲望も、否定するべきものではありません。ひとつ内側のドーナツ = 生命・生殖の世界をコントロールし、具体的な行動を起こさせる、という重要な役割を担っているからです。

こうして、肉体 + 生命 + 感情 という3つの層がそろいました。これならば、どうでしょうか？

ここまでくると、“ひと”と認めてあげたくなります。ところが、まだ足りないのです。なぜなら、この3つは、動物でも達成しているからです。



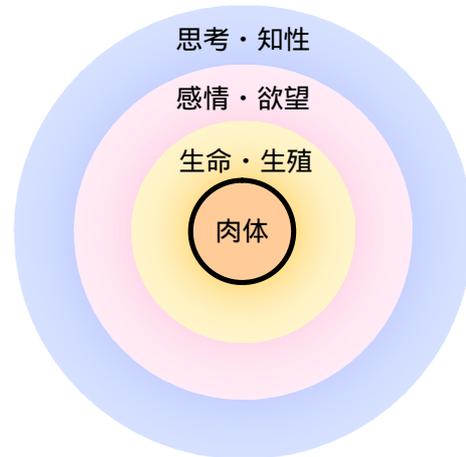
だとすると、さらに加えなければならないものは、なんですか？

それが、“考える”ということです。ひとは、思考し、想念をもつ、知的な生きものだからです。動物との違いが、ここに 있습니다。

そういうわけで、3つの層に、もうひとつ、思考・知性のドーナツを加えることになります。

もちろん、ひとことで“考える”といっても、さまざまなレベルがあります。「このスイッチを押したらテレビがつく」という簡単なものから、数学の方程式や倫理的・哲学的なテーマにいたるまで、その幅はとても広いです。しかし、“個人を越えた客観的な真理”という点で、これらはみな共通しています。“エゴを越えた世界”と称してもよいでしょう。

ですから、この世界については、感情・欲望が主観的（自己中心的）であるのに対して、客観的であるところに大きな違いがある、といえます。「なにが欲しいか」ではなく、「なにが正しいか」という見方になるのです。



肉体 + 生命・生殖 + 感情・欲望 + 思考・知性
この姿が完成します。

こうして、動き、欲し、考える“ひと”

最後に、ここまでの内容を、“波動”という切り口からお話させていただきます。

繰り返しになりますが、肉体を除く3つの世界をつくっているものは振動するエネルギーである、と考えられます。これを、“波動”と呼んでいます。

でも、ほんとうは、肉体もまた、波動のひとつに数えることができるのです。物質も、ミクロの世界を覗いてみると、振動の集まりにほかならないからです。

... と聞くと、「おなじ波動なのに目に見えるのはなぜ？」と、奇妙に思われるかもしれませんね。それは、こういうことです。

扇風機の羽根も、回り始めはゆっくりしているので目に見えますが、速くなると、見えなくなります。目が追いつかないからです。

肉体は目に見えるのに、他の3つは見えない、というのも、これと同じことです。「ひとの目」というセンサーは、肉体（物質）の振動数には追いつけるが、それより高い振動数には追いつけない、というわけです。

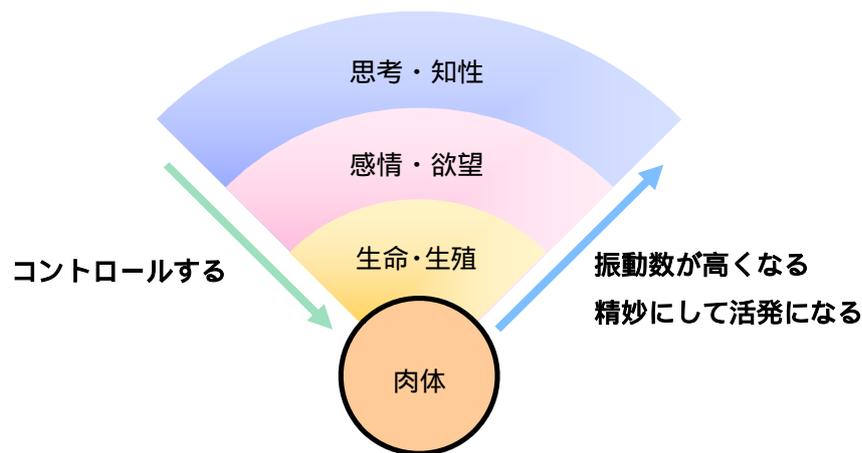
つまり、肉体も、振動数がきわめて低く重くだけであって、振動するエネルギー = 波動であることに変わりはないのです。

では、ここで、4つの領域の関係をもう一度整理しておきましょう。

層になったドーナツは、外側のものほど振動数が高くなります。精妙にして活発な、次元の高いエネルギーになり、波動が高くなるのです。内側のドーナツは、生地のきめが粗く、ザラツとした舌ざわりですが、外側のは、それが細かく、なめらかなのです（1個30円から1,000円くらいまでに相当する違いがあります）。

波動測定を何度かお受けになった方ならば、ご自身の波動値が回を重ねるごとに上昇していくのをご覧になっていることでしょう。この時、波動エネルギーは、その周波数を高め、より精妙かつ活発なレベルに移行しているのです。

つぎに、それぞれの働きを見ますと、一番外側の思考・知性は、感情・欲望をコントロールする立場にあります。したがって、これらが健全な人は、感情や欲望のありかたも健全です。すると、それが生命・生殖のエネルギーをよいバランスに整えるので、生きた肉体を健全に保つことにもつながります。こうして、心身ともに調和した“ひと”ができあがります。



ちなみに、いまの医学では、見えるのが肉体だけなので、科学で扱えるこの世界だけを対象に治療をおこなっていますが、ほんとうは、その背後の見えない領域をも考慮してほしいところです。実際、そういった考え方のお医者さんも、少しずつ増えてきています。

これら4つの層からできている“ひと”のなかであって、“わたし”は、感情・欲望と思考・知性との狭間^{はざま}で右往左往しています。これが、人間の常です。しかし、その本来の姿は？ といえば、より外側の層へ、つまりより高いレベルに向かって成長しようとしている、ということがができるでしょう。

間違いだらけの人生ですが、誰も、そのように願っているのです。わたしたちは、みな、^{けなげ}健気です。